

尼僧の告白——白と杵の意味

定方 晟

岩波文庫の中村元訳『尼僧の告白』は単純明快な詩の集成で、一気に読み終えることができる。しかし、その中にどうも腑に落ちない詩がある。最近それを腑に落ちさせてくれる論文に出あった。この論文は有名な学術雑誌に出ているので、多くの人を読んでいるであろう。しかし、いまだ読まず、私と同じような疑問を抱きつづけている人がいるであろうから、それらの人のためにこの論文の主張を紹介しよう。

問題の詩はつぎのようである（番号は詩の番号）。

(11) 三つの曲ったもの、白と杵と意地悪な夫とから脱れたことによって、わたしは巧みに脱れました。みごとに脱れました。わたしは生と死とから脱れています。迷いの生存に導くものは、根こそぎにされました。（ムッター尼の詩）

(23) よく脱れた尼よ。わたしは、杵を手にもつ業^{わざ}からよく脱れた。わたしの恥知らずの[夫は]、かれの影さへも[嫌だ!] わたしの鍋は、水蛇の臭いを放つ。

(24) (煮え立つときの) チチティ! という音を立てて、わたしは貪りと怒りとを滅ぼしくします。そのわたしは、樹の根もとに近づいて「ああ、楽しい」といって、(その境地を) 楽しいことだと思って、瞑想します。（以上、名の知られていない尼僧の詩）

注にはダンマパーラ（5世紀）の解説が紹介されている。詩（11）については「この婦人の夫は僂僂であり、かの女は他人のために穀物を臼でついて生計を立てていた」。詩（23）については「この尼僧は、世俗の生活にあったとき、貧乏であったので、みずから杵をつく仕事をしていた」と。白と杵を「曲ったもの」とすることについては、ダンマパーラはそれらを使用することにより背中が曲るからだとしている。つまり、「脱れた」とは「苛酷な暮らしと意地悪な（醜悪な）夫とから脱れた」ことを意味するというのである。

しかし、苛酷な暮らしの比喩のために臼や杵を持出すのは不自然のように思われ、詩（23）では言葉が補われすぎのように思われる（「手に持つ業」も補いである）。鍋が臭いのは使い古したためであるというが、困窮の様を示す表現としてそれが十分であるかという疑問が生じる。

そこで他の翻訳を参照してみた。増永靈鳳訳¹と早鳥鏡正訳²を見ると、詩（23）の後半部（「わたしの恥知らずの」以下）が中村訳と異なる。それを早鳥訳で示すと、「傘作りにも劣るわが夫は、恥知らずであり、わたしの釜のなかは、貧しかった」である。

ここでパーリ原典とイギリスの学者ノーマンの英訳とを見てみよう。

<パーリ原典>

11. sumuttā sādhu mutta mhi tīhi khujjehi muttiyā /
 udukkhalena musalena patinā khujjakena ca /

mutta mhi jātimaraṇā bhavanetti samūhatā. //

23. sumuttike sumuttikā sādhu muttika mhi musalassa /
ahiriko me chattakam vā pi ukkhalikā me daḷiddabhāvā ti.//

24. rāgañ ca ahaṃ dosañ ca vicchindantī viharāmi /
sā rukkhamūlam upagamma aho sukhan ti sukhatō jhāyāmi. //³

<ノーマンの英訳>

11. I am well-released, properly released by my release by means of the three crooked things, by the mortar, pestle, and my crooked husband. I am released from birth and death; that which leads to renewed existence has been rooted out.

23. Well-released, well-released, properly released am I from the pestle. My shameless man, even his sun-shade, etc. (disgust me). My pot gives forth the smell of water-snake.

24. I destroy desire and hatred with a sizzling sound. (That same) I going up to the foot of a tree, (thinking) “O the happiness”, meditate upon it as happiness.⁴

ノーマンの英訳は中村訳とほとんど同じである。ただし、ノーマンは詩(11)については、「三つの曲ったものから脱れた」とせず、「三つの曲ったもののおかげで脱れた」とする。また、詩(23)の sumuttike (呼格)を sumuttikā (主格)とする版にしたがい、Well-released と訳す。だから、ノーマンの Well-released が意味するのは「よく脱れた尼よ」ではなく、「わたしはよく脱れた」である。

詩(23)の後半部には版によって重大な異文があり、諸学者はそれに対して異なる態度をとるが、尼僧が出家前の生活を嫌悪している点では、ノーマンを含め一致している。ノーマンは、ダンマパーラにしたがって na ruccati (快くない)を補って解釈し、“daḷidda-bhāvā (貧しい存在) ti”をビルマ版、コロンボ版の “deḍḍubham (水蛇を) vāti (臭いを放つ)” に替えて訳している。

さて、冒頭に触れた論文はイギリスの学者 J・ライトが発表したものである⁵。かれはその中で、臼 (udukkhala) と杵 (musala) は生殖器を意味すると述べている。そして、その傍証として『シャタパタ・ブラーフマナ』の musala と ukhā (ŚBr.1.1.1.22;10.4.1.2) を挙げる。

私はこの「生殖器」の一言によって長年の疑問が水解するのを覚えた。もしライトが正しければ、詩(11)と詩(23)はつぎのように訳せるだろう⁶。

(11) よくぞ脱出した。私は見事に脱出した。三つの歪んだものからの脱出によって。／臼と杵と歪んだ夫とから。／私は生と死から脱出した。生存に導くものは除かれた。／

(23) よくぞ脱出した。よくぞ脱出した。私は見事に杵から脱出した。／私の無恥なるもの、

またはきのこ。私の鍋は水蛇の臭いを放つ。

詩(23)については、ライトはこのほかにもユニークな解釈を提示する。かれによれば、この詩の作者は知られていないのではなく、スムッティカー（「解脱した女」を意味する）という尼僧である。かれはこの詩の後半部を *ahirik[ā] mē chattakam vā pi ukkhalikā mē dedḍubhā vā ti* と訂正し、そこに *vā ... vā ...* の構文を見て、つぎのように訳す。

私はスムッティカー、よく逃れた者である。／私はよく杵から逃れた。／それは私にとってまむしきのこ（*ahicchattraka*）のようだったし、私の鍋は虐待される水蛇のようだったので。

男性僧の詩集である『仏弟子の告白』に類似の詩があることが諸学者によって指摘されている。その詩を岩波文庫の中村元訳によって示すと、

(43) よくぞ脱れた。よくぞ脱れた。わたしは三つの曲れるものから脱れた。わたくしは、鎌で [刈ること] を脱れた。わたくしは鋤で [耕やすこと] を脱れた。わたくしは小さな鋤で [耕やすこと] を脱れた。たといそれらがここにあるうとも、もはや用はない、もはや用はない。スマンガラよ。瞑想せよ。スマンガラよ。瞑想せよ。スマンガラよ。怠らずにおれ。(スマンガラ長老の詩)

ダンマパーラによると、「鎌で刈る」や「鋤で耕やす」は労働の苛酷さを表現するが、これも性の隠喩で解釈することができそうである。耕作が性交の隠喩になる例は叙事詩『ラーマーヤナ』にある。ダシャラタ王が畝（サンスクリット語で「シーター」）を耕していたとき、娘が生まれ、シーターと名づけたというのがそれである。したがって、「鎌」「鋤」「小さな鋤」は陰茎、指、舌などを指すと考えられる。スマンガラは元気なからだを持ちながら、必死になって性欲と戦い、瞑想へ自分を駆り立てているのであろう。

ライトによると、この詩の作者の名はスマンガラではない。スムッティカである。したがって「よくぞ脱れた。よくぞ脱れた」は「私はスムッティカ、よく脱れた者である」と訳すべきであり、「スマンガラ」は「幸いなる者よ」と訳すべきである。

詩(24)の中村訳には「チチティ」という擬声語がある。これはある版の語 *cicciṭi cicciṭi ti* を採用して訳したものである。「チチティ」をライトは「熱した物体が水に入れられたときに発する音」と解釈し、貪りと怒りが鎮まる様をたとえたものとする。

周知のように、仏教の僧団には多くの戒律がある。その中で、それを犯せば僧団を追放されるという重罪（波羅夷罪）が四つあり、姪、盗、殺、妄の順で列挙される。殺や盗より姪が先に挙げられるのは意外に感じられようが、姪こそ比丘にとって最大の煩惱であったろうと考えれば、むしろそれが当然ということになる。『律蔵』経分別を読めばわかるように、比丘の中には、女性との性交を禁じられて、メス猿と交わったり、男色、屍姦に走ったりするものも

いた。比丘尼の中には、蓮華色のように、性的被害の辛い体験から逃れてきたものがいた。こうした状況を考えれば、僧や尼僧の告白の中に性に関する生々しい告白が含まれていても少しも驚くことはない⁷。

1. 増永靈鳳訳「長老尼偈経」(南伝大蔵経、第25巻、昭和11年、所収)
2. 早鳥鏡正訳「長老尼の詩」(世界古典文学全集6『仏典I』、筑摩書房、昭和41年、所収)
3. H.Oldenberg & R.Pischel (ed.), Second ed. by K.R.Norman & Alsdorf: Thera- and Therī-Gāthā, PTS, 1966 (Norman は Therī-Gāthā の部分を担当) からである。
4. K.R.Norman(tr.): Elders' Verses II, PTS, 1971.
5. J.C.Wright: Old wives' tales in Therīgāthā: a review article, BSOAS 62-3, 1999, pp.519-528. 白と杵にふれた部分は p.523。
6. 白と杵は日本でも生殖器の象徴になる。平凡社「世界大百科事典」〈白〉につきのように記されている。「白を女性に、杵を男性に見たてる思想とともに、婚姻・出産・育児と白・杵に関する習俗も広く行われている。新婦が新郎の家に到着するのを合図に入口の左右でもちつきを行うとか、新婚の夜の初まくらに杵を使用する。」
7. もしかすると、問題の詩は単なる好色家の作品かもしれず、私のこの論評はまじめすぎると笑われるだろう。